

「花の回廊」へようこそ（1）

2022.05.09

1 花の半島に住んで

①命が華やぐ初夏がやってきた。伊豆半島は花の半島である。

アトリエは西に天城の連山を望み、南に大島を眺望できる。ここは高台で、数キロ先の海辺まで樹海が広がる。

マグノリア、カルミア、つわぶきなど、四季を通じて純白、深紅、黄金の色鮮やかな花が咲き乱れる。

②今年は花も鮮やかで、木々の緑も美しい。本当に、数年ぶりのことである。

3メートルを超えるシャクナゲは、真紅で大ぶりの花をつけたし、藤の花はテラスに巻きつき淡い紫色の花房が垂れ下がる。

姫沙羅は5月の空に枝を広げ、コナラやクヌギも今年は一段と葉色も鮮やかで葉づきもよい。最近は居間から見る光景も、緑一色である。

③高原にアトリエを構えたのは二昔前になる。

この辺りは黒潮の流れが近く、空気は澄み渡る。海の光と山の光が交錯して、光の粒子が燐々と弾ける。一陣の風が吹くと、光は揺らぎ、花の色調も変わる。

④週末を何度かアトリエで過ごすうち、妻が「光が花と踊っている。花と光が音楽を奏でている」という。「どんな音楽？」と聞くと、「ドビッシーの『月の光』を聞いているみたい」という。

不思議なことに、彼女は花と対話し、光と戯れ、自然と交響しているのだった。

小さい時はピアニストを目指したと聞いていたが、わたしとは全く違った感覚の持ち主だった。結婚後30年近くたって、はじめてそうと知った。

⑤やがて彼女は花の写真を撮り始めた。毎朝、近くの野原や雑木林や丘陵に出かけて、2時間近く飽きずに花の写真を撮っていた。それを友人・知人に季節の挨拶として送った。

はじめは「いつまで続くのか」と冷やかし半分だったが、しばらくして、彼女の作品特有の優しさ、繊細さ、それに独自の空間把握に気がついて、本格的に応援する気になった。

⑥「50 の手習い」で、彼女は色彩理論の資格を取り、プロの写真家に学んで本格的に花の写真を撮り始めた。10 年近くの研鑽を重ねた後、日本と欧州で個展を開くようになり、妻（秋津マキ子）の第二の人生が始まった。

⑦写真を撮っていると、見知らぬ農家の老人が、畑のアリウム・ギガンチウムの束をバッサリと切って、「持って行け」という。花友（このあたりでは「ハナトモ」と呼ぶ）からは、玉ねぎや大根をもらうなど、実利も多い！

プロ用の大型カメラと三脚を持って、雑木林や野辺を探索する秋津の姿は、もはやこの辺りの「風物詩」である。

2 心境が変われば見方も変わる

① 彼女の独特的な空間認識を象徴する一連の作品がある。

下記のタカサゴユリ（高砂百合）は、今から 10 年ほど前に撮った。花言葉は純潔、飾らぬ美である。



②その当時わたしは、確かにいいと思ったものの、あまりにもシンプルな作品なので、つい見過ごした。

中央に純白の百合を浮き立たせ、背景は黒一色。白と黒の対比は、受け手に 1 種の緊張感を

覚えさせる。あまりに単純でそぎ落とした作品は、見る者にある種の覚悟を迫る。
それがわたしにはちょっとしんどかうた。

③数年前パリで個展を開いたとき、来場者の中にシニアのギリシャ美術研究家（日本人）がおられた。

その女性から「どの作品にも禅の影響が感じられる。そうもくこくどしつかいじょうぶつ草木 国土 悉皆 成仏 の自然観が表れている」といわれて、秋津は驚いたらしい。自分ではそんなつもりは全くなかったからである。

④そういえば、秋津は以前から「写真を撮るときは、花を観察するのではなく、花と一体になる」といっていた。

これは禅の観想という技法に通ずる見方だが、わたしはあまり気にしていなかった。まさか彼女の作品が日本の自然観を反映しているとは、考えもしなかった。

⑤しかし、齢を重ねて心境も深まり（？）、「和の美」に強くひかれるようになって、以前は気づかなかったこの作品のよさを改めて知った。百合が、命のエネルギーを放散する気配を感じる。その凛とした美しさに、心を洗われるようになった。

最近では、これこそ「究極の美」だと感じ始めている。

⑥こんな風に、同じ作品でも受け手の美意識や心境の変化によって、評価は変わる。
その時その時に、自分がよいと思うのであれば、それが自分にとって最高の作品である。

3 まどろ 微睡 むマグノリア

①アトリエから坂を下っていくと、林を切り開いた千坪ほどの庭がある。庭というより、自然観察園と呼ぶほうが正確だろう。オーナーの方とは、花の写真を通しての長い間のお付き合いでの入り自由にさせてもらっている。

何よりもうれしいのは、四季を通じてさまざまな花木が咲き乱れ、絶好の被写体が多いことである。

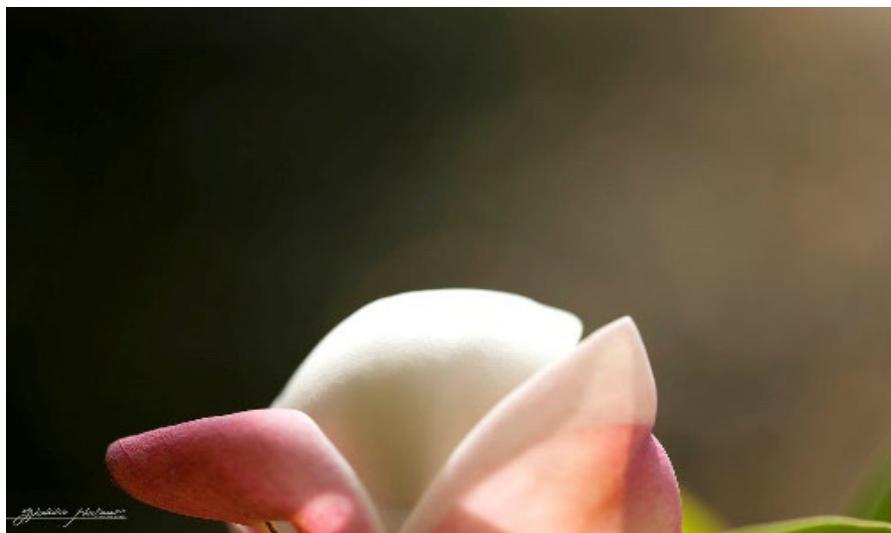
②特に、春先から初夏にかけて咲く白、薄紫、ピンクなどのマグノリア（木蓮）が素晴らしい。

マグノリアは、モクレン科の花木の総称で、白木蓮(ハクモクレン)、コブシ、泰山木(タイサンボク)、ホオノキ、オガタマなど多種多様で、大きいものは5メートル位。その花は淡い濃いものまで、どれも素敵な芳香を放つ。撮影中は、ミソサザイ、ウグイス、シジュウカラなど小鳥の鳴き声も楽しめる。

③ただし、この辺の撮影には危険も伴う。マムシ、スズメバチ、チャドクガなどが多いので、夏でも長袖は勿論だし、場所によっては長靴も必須である。近くには、猪、ハクビシン、猿もやってくるから油断がならない。

④秋津の作品には、高砂百合とは違い、ほのぼのとした、快適さ、穏やかな気持ちにさせる一連の作品群がある。

この庭で写した作品は、何度か個展に出品した。以下の「^{まどろ}むマグノリア」はその一例である。



⑤個展を取材に来た女性アナウンサーが、インタビューしている。

優しいぬくもりを感じる写真ですね。

お母さんが、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた時の感動がよみがえります。
でもこれは何の花かしら？

⑥秋津が答えていた。

これは大山蓮華おおやまれんげといい、花言葉は「変わらぬ愛」です。
木蓮の一種で、高さは3メートルほど。春先に白い花が咲きます。
優しい光になるように、逆光ではなく順光で撮りました。

⑦刷り上がった時から、わたしはこの作品が大好きだった。

朝光が右斜め上から左下にかけて対角線状に差し込み、花びらを浮き立たせる。

花弁の産毛は瑞々しい桃みずみずを思わせる。

背景はビロードを思わせる柔らかな色調で、小豆色あずきいろから桜鼠さくらねずみへとグラデーションをなして広がる。赤ちゃん蓮華が、眠りから覚めきらず、朝の淡い光にまどろんでいる様子が感じられる。

実際、長い間部屋に飾っても見飽きることがない。わたしと極めて相性のよい作品である。

⑧だが、一見地味な感じなので、秋津は作品のよさに気がつかなかつた。

始めは個展に出すつもりはなかつたが、わたしが何度も勧めるので出品することになった。
出品してみるとやはり好評だった。

デザイン学校の学生らしい学生3名が、作品の前で30分～40分も光のとり方について議論していた。

⑨あるシニアの女性は、作品の前で40分近く立ちどまり、花と対話をしている風だった。

彼女の態度から、作品に感情移入している様子が感じられた。

おそらく、この「おだやかな時間」と「心地よい空間」を楽しんでいるのではなかつたか。作品は、もう作者から独立した存在となっている。

⑩この作品には「微睡まどろむマグノリア」とタイトルをつけて、朝日に当たってウトウトして

いる花のイメージに重ねたが、海外ではタイトルはいらないという観客は多い。

自分がどう感じるのかが大切なので、余計な言葉（タイトル）があると、作品を純粋に楽しむ邪魔になるという。日本の観客とは違い、それくらい自分の好みを優先する。

4 相性のよい作品の選び方

①たしか、旧テートギャラリー（ロンドン）の館長が面白い話をしていた。絵画を買い入れるときは、直感的に作品の良し悪しを判断するのではなく、時間をかけて購入するかどうかを決める。理想的にはお目当ての絵画を借り入れて、3ヶ月ほど見続けるとよいという。

②プロでさえ、最初の印象は当てにならないらしい。どうしても、コントラストが強かったり、切れ味がよかつたり、人目を引く作品に目を惑わされる。しかし、身近で見続けると印象が変わる。人目を驚かす作品はやがて飽きてしまう。長い間見続けても飽きない作品こそ、時代を超えて愛される作品である。

③今では圧倒的な人気があるビンセント・ゴッホの絵も、当時の美的感覚に合わず、生前に売れたのはわずかに「赤い葡萄畠」一枚だった（諸説あり）。こんな例がアートの世界では不斷に見られる。作家の世評も学歴もキャリアも、作品の出来栄えとは一切関係がない。

④「マネジメントの父」と呼ばれたピーター・ドラッカー（1909年-2005年）は、自分の好みがはっきりしていた。

彼の20代始めのころの話。ロンドンで銀行員だったドラッカーは、帰途にわかつ雨にあつた。たまたま雨宿りに入った展覧会場で日本美術に出会い、たちまち「恋に落ちてしまった」。

彼は水墨画、文人画、禅画などの日本画を蒐集し、特に花鳥画や動物画を好んだ。世間の評判とは関係なく「生活を豊かにし、生活の一部とすることができるかどうか」を基準に日本画を集めた。身近に飾って長く楽しむことができるかどうか。これが唯一の基準だった。画商の評価や作品の投資価値には興味がなかった。

⑤後年、彼は驚くべき人生哲学を語った。

わたしは、正気を取り戻し、世界への視野を正すために日本画を見る。

「日本画を見て正気を取り戻す」とはどういう意味だろうか？
ビジネス一辺倒の生活をしていると、心が枯れて正常な判断を失う、という意味だろうか？

⑥本来、アートは自由であり、多様である。どれがよい絵画だとか音楽だとかは誰にも決められない。究極には好みの問題である。好き嫌いに客観的基準はない。アートは、功利主義・効率主義を優先するビジネスとは対極にある。正解もなければ勝者もない。